

空手道詳説（28）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

（4）敗北の結果

④ 琉球側から見た謝名親方

イ 謝名反発の原因

謝名は、ただ単に明国への留学や、明国使節団員に複数回加わったからといって、明寄りの思想や言動に繋がったと判断するのは早計である。

謝名には大陸の血が濃く流れているだけでなく、明という国を実際に体感し、大国の懐の深さを感じ取り、日本との国策の差も比較してのことであろう。親明派で嫌日派と言われたのは、彼の知性の中で醸成されたものと考えられる。

琉球は、栽培農業を開始したのがAC1世紀から、地方豪族の按司が発生したのが800年頃、舜天が統一王として即位したのが1187年、1291年と1297年の2回にわたって元軍の来襲を撃退した過去を持つ。

この琉球史から、例え小国と言いながらも、薩摩の侵攻まで一度も他国に支配された経緯を持たない完全なる独立国であった。謝名の脳裏にも、この事実は刻み込まれていたであろう。

薩摩の侵攻の前にして、要求をすんなりと受け入れていたらどうなっていたのか、考察してみる価値はありそうだ。

薩摩の要求とは、奄美諸島の割譲と対外貿易の支配介入にあった。琉球王が和睦の条件としてそれを受諾すれば、薩摩軍の侵攻はなかった訳で、戦争は起こらなかった。当然のこと尚寧王他の重臣が薩摩に連行されることも、謝名が薩摩の要求する『琉球は、往古より薩州島津氏の附属国である・・・』という

起請文への署名連判を拒否して処刑されることもなく、全てが外交事案の処理で丸く収まってしまう。

しかし、歴史の記述というものは、時たま歪曲されたものが正当化されて伝わる場合がある。それは、「中山世譜」にしても御多分に漏れないこと前述のとおりで、後の世に至って覆すに足る確たる論証が出ない限り、誤った史観はそのまま一人歩きする危険性だってある。

筆者は次の仮説を立ててみた。

和睦工作に訪れた薩摩の使者を迎え、琉球国は薩摩の要求を了承し、奄美諸島を割譲して和平が成立すれば、戦争による衝突は危ういところで回避される。

その後、琉球は明国との朝貢関係を従来通り継続し、薩摩は国政に関与して傀儡国家が誕生する。

戦争もなく薩摩から思うがまま制圧されたのだから、日本の史書には「室町時代の15世紀当初に、3代将軍足利義満が薩摩の国主・島津氏から所望されて琉球を与え、以降、薩摩国の南端特別地域として統治され、明国（後には清国）をはじめ朝鮮や南方方面と交易していた。元々琉球国は日本の一部であって、国として最初から存在しなかった」と。

謝名がそこまで考えたかどうかは別として、決死の抵抗を試みた裏には、極度に膨れ上がった悲憤が積っていたのだろうか。

ウ 敗戦と謝名の存在

1609年4月2日、降伏によって首里城が引き渡され戦闘は終了し、5月15日には尚寧王や三司官などの重臣100名余りが鹿児島に連行された。

2年後の1911年9月19日、島津家久は尚寧王と三司官に対して提示した起請文への連署をもって帰国を許そうとするが、謝名一人これを拒否したので、家久は臣下を派遣して説得に当たらせ、一方尚寧王も『署名して、一緒に国に帰ろう』と涙ながらに諭すが、様々抗弁して拒絶したため、同日遂に斬首の刑に処せられた。

昔も今も、謝名の抵抗と死を琉球（沖縄県）の人たちは忘れていない。筆者はそれを推考してみた。

- ☆ 王の意思に反して戦況を悪化させるが、これが謝名にとっては精一杯の忠誠心の現れであった。
- ☆ 島津氏が提示する起請文に対し、王と三司官の全員の署名が帰国の条件とされながら、琉球の自由と自主性が剥奪されると考え、自らの死をもって反発した。そのいたまれなさが哀れである。
- ☆ 謝名の署名拒否と処刑は、一貫した愛国心を現れとして、後々まで尚寧王や

重臣たちの心に刻まれた。

☆ 壮絶ともいえる気骨の精神は、王国と人民の間で密かに語り継がれた。

☆ 後の歴史書（中山世鑑など）で非難の対象となり、悪者に仕立て上げられようとも、母国の威信と尊厳を懸けて薩摩と対決した謝名は、陰ながら英雄視されてきた。

エ 謝名の処刑と戦争責任

謝名には、英雄的な一面の他に、侵攻を招き戦況を拡大させてしまったという、功罪の両面を合わせ持つ。

世界的に見た戦後処理の中には、往々にして敗戦国側に科せられる戦争責任がある。この琉球侵攻（琉球征伐とも言う）は、薩摩が一方的に仕掛けたことと、その後の支配体制を展望してか、戦争責任問題は当初から出ていない。

王に対する謝名の奏上が平和の道を絶ち、戦場で最も強く抵抗したことはいえ、謝名処刑の理由は戦犯でなかったことも明白である。この事変における処刑者は、謝名一人であったのも事実である。他の理由が重なっていることはあるのか、探り得る何物もない。

何時の世も戦争による被害損害は大きく、混乱とともに大勢（たいせい）の変化をもたらす。次項で述べるように、その後の琉球国は、長く苦難の道を歩まされることになる。

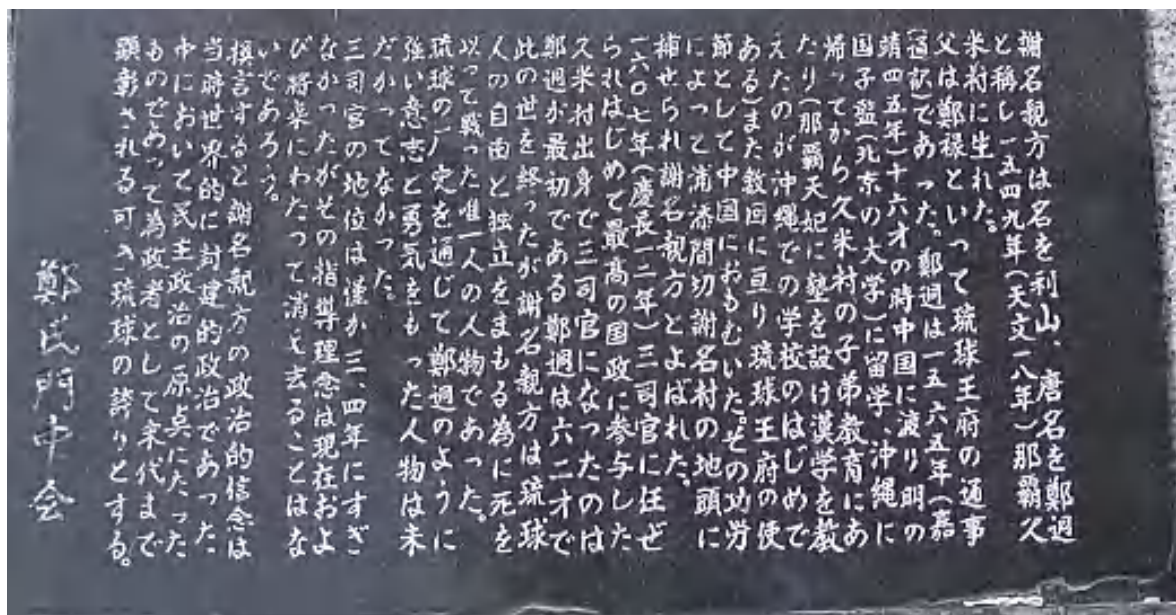
オ 謝名の顕彰碑



今も沖縄県人の中には、謝名の業績を偲び、命日の9月19日には黙禱を捧げる人が多いという。

謝名の墓は、那覇市織名に墓石がある。また、鄭氏一族によって建てられた顕彰碑が久米村に近い那覇市若狭の旭ヶ丘公園にある。碑の標題は「鄭廻（ていどう）謝名親方利山顕彰碑」である。

碑文には、「塾を設けて漢学を教えたのが沖縄での学校のはじめ」とか、「琉球人の自由と独立をまもる為に、死を以て戦った唯一人の人物あった。琉球の歴史を通じて、鄭廻のように強い意志と勇気をもった人物は未だかつてなかった。」と書いてあるのが目を引く。



(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和43年11月26日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970年9月1日初版、榊勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和50年7月25日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012年6月20日初版、榊河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011年6月25日初版、榊角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686年4月25日初版、榊中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005年12月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他31名、昭和52年3月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和47年4月20日初版、閣文社発行
- ・ 沖縄県教育庁文化課編集「中山世鑑」昭和57年10月15日、沖縄県教育庁発行
- ・ 裕樹書林発行「喜安日記」2009年4月28日発行、池宮正治解説